

用の美を極めた江戸箒

「白木屋中村伝兵衛商店」高野純一

安藤広重の『名所江戸百景』に「京橋竹がし」というのがあるが、それには京橋川の河岸に運ばれてきた竹がびっしりと立てかけられている。当時、京橋界隈の河岸を竹河岸と呼んだ。白木屋中村伝兵衛商店の創業は天保元年（1830）。竹河岸に水揚げされる竹と箒草を使って江戸箒を作るようになったという。

PROFILE

高野純一 | たかのじゅんいち

現在七代目を継ぐ店主・中村悟氏を支えて店長を務める。配達のアルバイトから入ったものの、今では江戸箒の“用の美”、人格者でもあるお抱え職人高木清一氏の仕事に惚れ込み、店を担っていく重要な人材となっている。夢は昔から変わらぬよい箒を、安く、気軽に多くの人に使ってもらえるようになること。

近年見直される箒のよさ

何でも使い捨て、という時代が過去のものになりつつある現在、箒の良さが改めて注目されている。京橋に店を構える白木屋中村伝兵衛商店は“江戸箒”で知られる老舗だが、つい数年ほど前までは箒を売るスペースは四畳半ほどしかなかった。それが現在は、雑貨のスペースがなくなり、店の中にびっしりと箒がかけられていることから、それがよくわかる。

「消費するばかりでいいのかと、エコや環境問題に興味を持つ方たちや、健康を気遣う方たち、家を傷めたくないといった方たちから、年齢を問わずご支持いただいています。

箒は掃除機と違って騒音も出さないし排気もありません。小さなお子さんが寝ているそばでも、深夜に帰宅されても使っていただけます。床や畳が傷むこともありませんし、重たい掃除機を引きずりまわす労力もありません。機械と違って故障しませんから、長くお使いいただけます。捨てる時も、土に還る素材ですから環境に負荷をかけません。

畳の次は廊下や板の間、玄関、そして天井払いや外掃きなど、下ろしながら長く使えます。相棒として使ううちに愛着もわき、関係性が育っていく。使い込むほどに手に馴染み、味が出てくる。そこに、箒を使う価値があるのではないのでしょうか。

おかげさまで箒の扱い量が格段に増え、10年前の年間売り上げを、現在ではひと月で売り上げるようになりました。特に20~30代の

方のお買い上げが増えています」

実用一本槍が生む“用の美”

創業は天保元年(1830年)。初代の藤兵衛は銀座で水売りをしていたのだという。

「水売りといえば、気楽なその日稼ぎの仕事。その藤兵衛がなぜ京橋で店を構えるようになったかというのは謎なのですが、“富くじ”にでも当たったのかもしれない。

当時京橋には竹河岸と呼ばれる河岸があり、一日5、6万本の竹が水揚げされ、ありとあらゆる生活用品の材料も運ばれてきていました。うちももとは荒物や畳表などを扱う生活雑貨の店だったのですが、竹河岸に運ばれてくる竹とホウキモロコシを使って江戸の終わり頃から自前で箒を作るようになったようです。どんな経緯で職人を抱えて箒を作るようになったのかといった詳しいことは、震災と空襲で記録が失せてしまっただけなのではないか…。

ただ、職人から職人へと技術は受け継がれてきていますから、箒の作り方は変わっていません」

“江戸箒”は白木屋中村伝兵衛商店の商標登録である。その名がつくまでは、座敷箒、関東箒などと呼ばれてきた。

「関西では座敷箒の材料としてシュロが一般的で、ホウキモロコシの箒は江戸独特のものでした。また、アカザ科の箒草は枝が硬いので、庭掃きにはいいのですが、座敷箒としては使えません。ホウキモロコシという箒草、しかも国産のものを使い、熟練の職人が丁寧に選り分けて

材料とし、編み上げていくのが江戸箒とほかの箒との違いです。

そしてもうひとつ違いをあげるならば、その実用的で簡素なフォルムでしょうか。狭い長屋でも機敏に使えるよう“軽さ”を追求し、耐久性や掃き出しのよさを実現するために、“コシがありながら柔らかい”ことを追求してきました。この2点を徹底して追い求めた結果、装飾性を一切排除した、この形になったのです。ぐっと掃いても、さっと掃き出しがきいて折れにくい。そんな自慢の箒です。

『焼印で付加価値をつけて高く売れば』、などという人もいますが、七代目にも私にも、職人の高木にも、そういう考えはありません。江戸っ子の意地、といいますか。『俺はそんなことしたくねえや』『そんななあ、いけすかねえな』、という

装飾を排除しながらも、その編み込みには“江戸の粋”ともいえる美が漂う。巷には錦糸や漆を使った100万円以上もする箒もあるが、そうした箒とは違う、“用の美”があるのだ。品のある居ずまいは、控えて深い。

誰にでも気軽に使ってもらいたい

「ホウキモロコシは、あちこちに自生する箒草と違って畑で栽培します。以前は千葉のものを使っていましたが、空港ができて生産が止まり、現在では筑波山のふもとの農家で作ってもらっています。国内でホウキモロコシを栽培する専業農家はほとんどおらず、国産品は大変貴重です。



高木氏の手になる最上級の箒、5万円也(上)。草の確保が難しく、年間10本も作ればいいほうだから。布テープは飾りではなく、その色により等級を表している。



馬毛を使った染み抜き。クリーニング専門店などでも使用されているプロ仕様で、大1260円、小735円。



編み上げた草を平らにならすための台と木槌。少なくとも昭和初期からはあったという年物で、現在も実際に使用されている。

「焼印で付加価値をつけて高く売れば」、
などという人もいますが、
そういう考えはありません。
江戸っ子の意地、といいますか。



種まきから3ヵ月ぐらいで収穫された穂は、
天日で3～4日乾燥させ、それから選別を
します。この選別が箒を作る上で最も重要で
最も難しい作業。職人頭の高木がひとつ
ひとつ手で触り、コシがあって柔らかいもの
を選別していきます。選り分けられたものを
実際に私などが見て触っても、その違いは
まったくわかりません。草の目利きになるには
最低でも10年はかかるといわれます。熟練の
職人のみができる仕事です。

次に、乾燥したままだと折れてしまいます
ので、3時間ほど水に浸けておきます。草の
太さや向き、クセを見ながら均一に仕上がる
ように束ねて編んでいきます。最後に大きな束
をまとめて締めるのを胴締めといい、この
あと、竹の柄を打ち込みます。付け根の部分
を編み上げ、穂先を切って揃えれば完成です。
草のしなりと軽さを出すため、内側には空洞
を作るなどの工夫も施されています。

高木のような熟練の職人ですと、編み上げ
から完成まで、長柄で一日3～5本というところ
でしょうか」

手間暇をかけて丁寧に作られた職人の箒は、
外国の草を使い、粗雑に作られた一般の箒とは
使いやすさも持ちもまったく違う。「長く大切に
使いたい」と考える人々にとって、全国でも数少
ない職人中の職人・高木氏の作る箒は「憧れ」

の箒だ。店長の高野さんも、「自信と誇りを
持って薦められる」と胸を張る。

「ただ、高木は昭和11年生まれですから、
いつまで箒が作れるかは、正直わかりません。
弟子はふたりいますが20代で、高木の域に
達するにはまだまだ時間がかかるでしょう。
間の40代、50代といった層がはっきりと抜け
ていますから、あと10～15年もしたら、一度
レベルが落ちることを覚悟しています。

国産のホウキグサも、供給源は筑波の農家
一軒きりですから、そこからの供給が途絶え
たらおしまい。草の確保のため、栽培から自分
たちでやれないかと、現在実験的に種をまいて
みているところです。10年以内には、なんとか
自給できるようになりたいのですが…」

人手不足も悩みの種だ。

「昔は副収入を得るために農家が箒をたく
さん作っていましたし、江戸には専門の職人
も人数がいて、分業で進めることができました。
今は人手が足りないせいでひとりで
全工程をこなさねばならず、負担がかかります。
兼業サラリーマン、リタイヤ世代の内職
といったアプローチも考えているところです。

将来的な夢は、質を落とさずに数を生産し、
安く売ること。価値のわかる人たちだけに、
というのではなく、日常の道具として、どなた
にも気軽に使っていただきたいのです。その

ためには、やはり人手と材料の確保、社会的
な価値観の転換が必要。

状況は決してよくはありませんが、ひとつ
ひとつやっていくしかありません。よいものを
絶やさずに次世代につないでいきたい、そんな
思いでやっています」

Text by : 平林豊子



先代店主のころから箒を作っている職人頭の高木
清一氏。昭和11年(1936年)生まれ、やはり箒職人
であった父の背を見て育ち、中学時代から箒を作り
始めた生粋の箒職人だ。箒一筋60年の、プロ中の
プロである。